妙の光（たえのひかり）

通刊30号 復刊５号
1992年４月10日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜
〒953 ☎0256-77-2025

藪椿（やぶつばき）

冬枯れの季節につやつやしい緑の葉、赤い花は文字通り春を告げて心なごませてくれる。最も美しいのは二月の白い淡雪をかぶって咲く花。四月、木の下にパラパラと赤い花を数多く落とした様子も風情がある。

海沿いで暖かく、藪の多い妙光寺では墓地を中心に実生の木がどんどん増え、とても数えきれない。それでも成長は遅く古木となると限られる。本来が暖地の植物であるが、日本海側では海沿いの古い寺や神社に古木や群落が多く見られるとかで、春を代表する神聖な木として、昔諸国を巡歴した宗教的旅人が種や苗を運んだとも言われている。

花がぽとりと落ちるため武士が首が落ちるのになぞらえたとして、一部では嫌うむきもあるが、本来は常緑で春一番に美しいところからこの字が当てられ、めでたい厄払いの木とされている。茶人も好む花で、境内の古木の下で野点てを楽しむ風景も春先に見られる。

〝ご判さま〟と伝左エ門家

小川英爾

四月二十七、八日、今年も〝ご判さま〟の行事がやってくる。ご判さまとは文永十一年（一二七四）三月十二日、日蓮大聖人が佐渡流罪を赦され鎌倉に戻る際、それまでのお仕えに感謝して、幕府の役人遠藤左衛門尉藤原正遠に授けられ、霊鷲山での再会を約束した印鑑のこと。

そこに添えられたお手紙には、日蓮大聖人が佐渡在島中の三年間、遠藤氏はじめ多くの人々に大変親切に身辺を譲っていただき、そのご厚意は、まさに法華経守護の諸天善神のお使いとして遣わされた方であろう、とまで感謝のお気持ちが記されている。佐渡を出立されるこのとき、遠藤氏が重病でお見送りもできない状況のため、日蓮大聖人遺愛の印鑑とこのお手紙を差し上げ、この世での再会が無理なら、お釈迦様が法華経を説かれた霊鷲山の浄土でお会しましょうと述べられている。

遠藤氏は本来幕府の役人として、罪人である日蓮大聖人を見張る立場にあった訳で、これほど温かいお譲りができるものではない。しかしそれ故にこそ法華経に身命をかけた日蓮大聖人のお姿が、その信心の一心において、おのずから人を信ぜしむるに足りる風格をそなえておられたことがしのばれる。

その後遠藤氏の子孫が五ヶ浜に移り住み、妙光寺の熱心な檀徒として現在に至る。この地方の日蓮宗信者はお手紙の写しにこのご判を押してあの世に携える習わしで、これを毎年四月二十八日、妙光寺にお運びしてご開帳する祭礼が〝ご判さま〟である。この行事は三百年以上続いていると伝えられ、江戸時代には特別に江戸城大奥や大阪の商人のもとまで出開帳した記録がある。昭和三十

五年頃までは、この日近郊近在の町や村から、日蓮宗信者に限らず妙当寺に向う人の列が続き、この地方に本格的な春の訪れを告げる祭りとして賑った。

この日、五ケ浜から遠藤家当主のお伴としてご判さまを肩に背負い、妙光寺まで歩くのが分家の伝左エ門の当主の役目。現在は埼玉県越谷市に住む遠藤祐弘さん(49歳)である。祐弘さんの母親が伝左エ門の生まれで、父親は仙台の出身。その父親が東京で会社を経営していた関係で昭和十七年に東京で生まれた。第二次大戦の激化で母親と妹の三人で祖父の住む五ケ浜に疎開、その間に会社が倒産して父親が失踪、生き別れとなってしまう。以来中学を卒業するまで五ケ浜で過ごし、幼くから母親に背負われてご判様に詣でた。十一歳小学校五年のとき祖父が亡くなり、子供ながら伝左エ門の当主として、ご判さま坦ぎの役が回ってきた。当日の朝、黒い学生服の上に遠藤家のおっかさまが徹夜で縫ってくれた小さいな羽織を着せられ、白いズック靴に手には数珠、小さな体に大きなご判様の包みを背負った姿に、集まった大勢の信者が目に涙を浮かべて見送ったという。磯伝いに妙光寺まで二時間の道のり、途中休むな、小便するなそのために水を飲むなと言われ、子供ながらに緊張した。不思議なことに子供の背に大きなご判さまの包みは重さを感じさせず、むしろ後ろから誰かに支えられている気持ちがしたという。

以来今日まで三十九年間、毎年この日の役を欠かしたことはない。中学を出て上京、苦学して高校、大学を終えた二十二歳から家計を背負って電線会社の工事部で働いた。二十七歳のとき母親が脳溢血で倒れて入院、その費用から仕事をやめて看病に当たる妹の小遣いまで、必死で働いた。熱心な仕事ぶりが認められ、援助してくれる人を得てプラスチックの成型加工会社を設立、発展したがオイルショックで規模を大巾に縮小することになる。現在は新たに得た知己から流行のタレントのキャラクター商品を企画、販売する会社を経営、全国に六店舗三十名の社員を抱え、三十九歳で迎えた夫人に経理をまかせて日夜忙しい。

入院中のベッドの上でいつもご判さまを心にかけ、祐弘さんが行きたくないと言うときにはそんなことを言わずにと言っていた母親は昭和五十九年に亡くなった。厳しい母親で、その姿とご判さまを坦ぎに行くことがいつも一緒に思い起こされるという。そしてこの日に行けば皆さんがご苦労さまと声をかけてくれ、昔お世話になった一人一人の顔が思い出されるとも。

「信仰などというりっぱなものではありません。今までこうしてこの役を務めてこれて、現在こうしていられるのも亡き母があればこそです。これがひいては日蓮聖人につながるのでしょうか。そう言えば今思い出しても腰の力が抜ける程、死に直面した事故を三回経験していますが、助けていただいたという実感があります。今となってはこの母とご判さま坦ぎが私の心の支えですし、その妙光寺がりっぱになっていくことが誇りです。そして今私の宝物は、たどたどしい字で届いた母からのたった一通の手紙なんです」と祐弘さんは語る。

この祐弘さんにとって四十回目の〝ご判さま〟がまたやって来る。昔から「〝ご判さま〟には必ず晴れる」の言い伝え通り、陽春の日差しの中、穏やかな日本海の磯辺にウチワ太鼓の音が響き、境内に入っては満開の八重桜の下を雅楽と読経が流れて稚児を先頭にお練りの行列が本堂に向かう。

遠藤左衛門尉御書

『日蓮此度赦免を被り、鎌倉へ登るにて候。如我昔所願今者已満足此年に当たるか。遠藤殿御育なくんば命永らうべしや。亦赦免に預るべし哉。日蓮一代の行功は、偏に左衛門殿等遊し候処也。御経に「天諸童子以て給使を為し、刀杖も加へず毒も害すること能はず」と候へば、有り難き御経なる哉。然者左衛門殿は、梵天・釈天の御使にてましますか。霊山えの契約に此判を参せ候。

一流は未来へ持せ給え。霊山に於て日蓮日蓮と呼び給え。其時御迎えに罷出づべく候。猶又鎌倉より申し進すべく候也。』

信心

改宗して妙光寺へ

巻町　和田喜作さん（75）

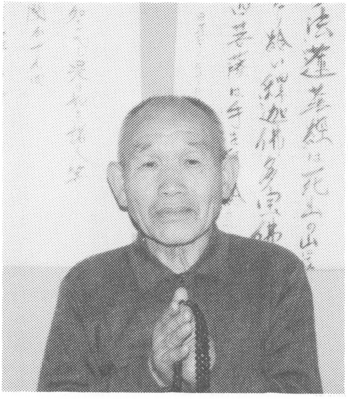
和田さんの生家は巻で浄土真宗。七人兄弟の五番目として生まれ、軍隊生活から戻ると母親の勧めで兵庫県西宮市に住む子供のない母の妹のもとへ行く。その伯母が熱心な日蓮宗信者で、家に安置する日蓮聖人像に毎日お経を欠かさなかった。そこから工場に通い昭和十九年京都の人と結婚、長男が生まれた。翌二十年三月、工場で機械に左手を挟まれ親指を残して四本を切断して入院、ショックもあったのか退院して自然に伯母について法華経を唱え始めた。

八月、空襲に焼け出されて一家四人巻へ移り、町内の浄土真宗寺院の裏の一角を借りて小さな家を建てる。和田さんが始めはオモチャを、後には衣類を仕入れて神社の境内で戸板一枚の上に広げて商い生計を支えた。貧しかったので一生懸命働き、ありがたいことに問屋の人達が皆親切だったのが忘れられないという。この間に突然妻が子供を残して実家に戻ってしまい、また伯母とのいざこざから和田さんはお経を読むのをやめてしまった。

四十一歳でノセさんと再婚、ノセさんも衣類を担いで行商に歩いた。伯母が亡くなり妙光寺に葬儀を頼もうか悩んだが、借地している都合上浄土真宗寺院に依頼し墓も建てた。昭和五十年ノセさんが乳癌で手術、翌年十一月再発して入院、このときしばらくお経をあげていないことを思い出し、家に戻ってお詣りすることなぜか涙が流れて止まらなかったという。明けて一月十二日家に連れ帰り、二十九日息を引き取るまで看取り続けた。伯母と同様浄土真宗寺院に葬儀を依頼した。しかし後にたびたびに夢に現れるので妙光寺に移ることを決心、三回忌を機に相方の寺に了解を得、墓も移転した。

以来商いを長男夫婦に一切まかせて写経に励み、昭和五十六年に角田山観音堂百ケ日連続登山を、六十年秋には岩屋七面様に百日通い毎日八～十時間かけて法華経全巻読誦を修行した。

「貧乏をさずかって生まれてきましたが、今こうしていられることを感謝しています」と笑顔で語る。



寺の動き

多くの方のご協力で境内が整備されています

ここ数年多数の方々のご協力で境内の整備が進み、「行くたびにお寺がきれいになって気持ちがいい」という声をいただいています。そもそもは境内の排水が悪く長年水害に苦しめられ、また地下水位が高く湿気で床下が腐ったり、庭木が育ちにくいという状況を改善するために、遊水池を作ったり沢を改修することから始まったことです。

長年の水害と宮沢改修工事

妙光寺が二八〇年前の火災を機に、今の題目堂前から現在の位置に移転新築したときは、高台でここから海が見えたと伝えられています。しかし、長い間に周囲が変化、現在は道路より一m以上低くすり鉢の状態です。そのため山から流入する宮沢が、四、五年に一度氾濫して境内一面が水没してしまうのはご承知の通り。先代住職もこれには苦労して、堤防を築いたり排水ポンプを常備して、自衛しながら宮沢改修を行政に働きかけてきました。

昭和五十六年頃から町と県が観光に力を入れ始め妙光寺が注目されたのを機に強力に行政に陳情、多くの方のお力添えで県の事業として着工が決定したのが六十一年。その後、沢筋の変更による一部地権者の反対、工法をめぐり寺と県との対立等の紆余曲折を経て、六十二年度から四年間を要して完成。最終的には全ての方のご協力で妙光寺の希望通り、可能な限りの川底の堀り下げ、自然石の護岸、遊水池とのかね合いへの配慮が実現して現在の姿となりました。

これまでには檀家役員の奔走、地権者の同意、福田石材様には護岸用石の寄付、造園設計士の野沢先生、土木設計士の渡辺先生には技術指導、その他個人名は出せない行政関係者等実に多数の方の応援をいただきました。

日苗上人顕彰の池庭工事

以前山門前参道の山側に浅く大きな池があり、屋根用の萱を取っていました。萱も不要で沼地状となっていたため埋めたてたところ、遊水池として大事だとの指摘を行政側から受けました。

おりから旧割前説教所跡地の売却を、相続名義人二百人全員の同意、ご協力をいただき、代金を昭和五十六年の客殿工事の不足分に充当しました。その記念に代金の一部でこの池を堀り直して周囲を庭園風に整備、大正初期に説教所創設の機縁となった妙光寺四十六

世日苗上人を併せて顕彰するという案が決まりました。以来樹木の寄進もいただき工事が進み、現在池と参道側半分が完成、池には石田金一さんら寄進の錦鯉が泳いでいます。

しかし山側半分が、浸透する地下水で植栽しても枯れるために工事を中断、暗渠排水が必要ですがそれだけの敷地がありません。これを心配した埼玉県のEさんが隣接地一五〇坪の土地購入代金寄進を申し出られ、昨年暮れ地権者の方が安価で譲って下さいました。

参道の整備工事

宮沢改修工事完了で橋が必要になり、小林与志英さんと故大滝金吾さんの家族の方の申し出で、昨年三月みかげ石の太鼓橋と参道の整備を寄進いただきました。同じ頃、老朽化で危険となって解体した冠木門(かぶきもん)を再建したいと、河村一良さんと弟さんから欅材一式が寄進されました。その工事費を寺尾勝子さんが寄進下さり立派に完成、お彼岸に橋の渡り初めと門くぐり初めを行いました。

参道脇駐車場はこれまで妙光寺の土地が三分の一しかなく、先年三分の一の地権者の強い希望があって借入れ金で購入、今年度で返済が完了します。残り三分の一を購入してはと代金を後藤則夫さんが寄進され、地権者五人に折衝しましたが、まとまらず借地として使用しています。その地権者の一人大滝実さんからは持ち分二十坪の寄進をいただきました。

そこで後藤さんの寄附金に境内整備に役だてて内藤世理さん、故石田タノさんからの寄附金を加え、このたび冠木門の脇に長さ十六間の板塀を新設、景観が一新しました。この板塀の前の道路整備と自動車用の橋に総代世話人十六人が、境内、駐車場、池山側の整地、土砂運搬に佐藤強さんが、さらにわかりにくいと言われる道路からの入口を整備するために内藤寅蔵、順輝、利夫さんの三人が寄進して下さいます。

ここ数年の間に本当に多数の方々のご協力で文字通り見違えるようになった妙光寺。せっかく豊かな自然の中にありますから、美しく心安らぐお寺でありたいと願えばこそです。仏祖三宝に、先代始め歴代の住職に、そして檀信徒の皆様に感謝申し上げます。

昭和62年8月の水害

文字彫りが完了しました

百八区画中百一件のお申し込みをいただき、原則として第一基分の受付けを停止いたしました。七区画の余裕がありますが、これは御本人が高齢であったり、あるいは現在御遺骨を抱えどうしても急ぎ欲しいという方への対応として考えています。第二基目建設は土地は十分ありますが、類似のお墓が増加していますので、希望者が二、三十名に達してからと予定しています。

遅れて大変ご心配をおかけいたしておりました墓碑の文字彫りですが、約六十名のお申し込みの方全員の分が完了いたしました。現場で作業する不慣れと、機械の不調、天候に左右されるといったことで遅れてご迷惑をおかけしました。お詫び申し上げます。お代は直接請求させていただきますのでお願いします。

半分以上に文字が入り何んと言いますが、賑やかになった感じがします。お名前だけ赤字で入れた方、シンプルに苗字だけの方、戒名を入れた方等さまざまですが、歌やお好きな言葉もかなりあります。ちなみに二、三ご紹介すると、

ここにとこしえに眠る
輪廻の実相に身をゆだねた愛する人
ここに眠る

よそならず人生終末吾亦紅

道は夢いのち不可思議に感謝して

やれやれゆっくり休まれるわいな

他に夢、心華、安居、恩といった字やローマ字もあります。

準備不足で春のお彼岸詣りのご案内が差し上げられませんでしたが、前日からお泊りの方がお一人、当日のお詣りには関東圏からも何人かお出かけ下さいました。百一件中地元新潟県は二十三件で残り七割が関東中心の県外の方です。お出かけの際はご遠慮なくご相談下さい。宿の手配もいたします。また八月末には第三回フェスティバル安穏の開催も検討中で、詳細は次号でお知らせします。

寺庭から

春・らんまん

春はある日ワーッとやって来るように感じられる。炬燵に入って背中を丸めているのにあきて、突然山を歩きたくなる。風が少し暖かくなった頃を見計らって外に出ると、たくさんの小さな芽吹きが見つかる。それから半月も立たないうちに梅、桜は勿論さまざまな花が咲き始めて、やがて春真っ盛りを迎える。ワーッと、というのがとっても楽しい。そうなるとお尻をあぶってはいられなくなり、お寺も冬眠から目覚めるように人間の出入りも活発になる。

私は正真正銘四月一日生まれ、三十うん年前私の誕生の連絡をうけた父は友人とマージャンの真っ最中で、エイプリール・フールの悪い冗談だと信じてくれなかったそうだ。予定日より一カ月も早い誕生だったものだから気持ちもわからないでもない。私はこの日に生まれた事をなかなか気に入っている。嘘をついても許される？日に、ポコンと誕生した。だから春がくると思いっきり浮かれなくなってしまう。月並みだが、春はいい。

でも、年々汚い春になって行くような気がする。山に行っても、海にいっても、道路を歩いていても、ビニールや空き缶の捨ててない所は皆無だ。ひどい所は大型ごみにでも出すようなごみが平気で沢沿いの窪地に投げてある。このままでは、二十一世紀には日本中ごみにうもれてしまうのではないかと思う。

私も文明社会の恩恵をうけて生活している。缶ジュースも飲めば、ビニール製品も使う。だから偉そうなことは言えないが、せめてごみはしかるべき所できちんと処理してもらいたい。投げ捨てだけは止めてもらいたい。それからついでに、山でこそ美しい雪割草やカタクリの花を持ち去らないで欲しい。切なる願いだ。

今日は二番目の娘の小学校の入学式だった。この子供たちが親になる頃、のんびりと春を満喫し豊かな自然の恵みを楽しむことができるだろうか？今の社会情勢をみると、そう浮かれたってもいられないように感じる。でも取り合えず今はまだ平和で素敵な妙光寺の春、爛漫。

（小川なぎさ）

行事案内

四月二十七、八日（月・火）

ご妙判ご開帳大会（ご判様）

二十七日午後4時　説教開始
8時　逮夜大法要
9時　山主説教
10時　施餓鬼法要
0時　通夜説教（二十八日朝まで）
二十八日午前10時　御妙判奉迎
12時　ご妙判御開帳

施餓鬼法要での塔婆供養申し込みは、世話人かお寺へ早目にお願いします。法要出仕の稚児に女児三名の余裕があります。ご希望の方はご連絡下さい。今年の年番は巻、割前組ですのでよろしくお願いします。角田の方には例年通り前日ののぼり旗立て、二十八日の御輿かつぎをお願いします。

身延山団体参拝旅行（十月五～八日）

詳細は追ってご案内しますが、日程が決まりましたので、ご希望の方は予定していて下さい。

写真集『日蓮を歩く』が出ました

妙光寺に心を寄せて下さる著名な宗教写真家、内藤正敏さんの写真紀行『日蓮を歩く』が佼成出版社より日本の祖師シリーズの一冊として出ました。手軽な本で文章も易しく読みやすくなっています。中でも妙光寺が岩屋を中心に八ページと破格の扱いになっています。

定価は二千円ですが、お寺で一割引の千八百円でおわけしています。また遠方で郵送ご希望の方は、送料込みで二千円ご送金下さい。郵送させていただきます。

あとがき

二月三月とずっと風邪を引き続け、高熱で寝込んだのが五日間、後は集中力がなくいつも冬場の仕事にしている文字書き、会計処理、原稿書き、お札作りがさっぱり進まず第五号も遅れに遅れてしまいました。何日にもまたがって原稿を書いていると、お知らせしたいことが増えて増ページになってしまいました。

私事ですが、昨年に続いて二番目の娘が小学校入学、来春には、三・四番目の娘達が入学と子供達は確実に成長していきます。それに引きかえ親の方の精神的成長は遅々として進まず年齢だけ重なることにいらだちを覚えます。

（小川）